

# 外国地名の意識

——「劍橋」「牛津」「聖林」「桑港」——

荒川 清秀

## Abstract

It is said that foreign terms have been accepted in Chinese first as phonemic loans and later have been substituted by semantic loans. While most of the western place names were adopted as phonemic loans from the beginning, there are some place names however coined as semantic loans such as Oxford = 牛津, Cambridge = 劍橋. This paper will illustrate that these place names had been phonemic loans initially and later coined as semantic loans and will discuss how and by whom were they coined.

## 0 はじめに<sup>1)</sup>

基本的に漢字以外の表記手段をもたない中国語では、西洋人の名前、それに地名は漢字で書かれる。それはもちろん音訳であって、中国流になまった音が当てられる。17世紀に来華したイエズス会宣教師のマッテオ・リッチは自ら「利瑪竇」と名乗ったが、これは姓（リッチ=利）名（マッテオ=瑪竇）ともに漢字で表した珍しい部類に属する。なかには、

馬克思 列寧 高爾基 白求恩

のように、一見姓名そろった中国人の名前らしくみえるし、当の中国人もそう思っているようなものがある。しかし、実際これらは、マルクス、レーニン、ゴリキ、ベチューンという西洋人の姓しか表してはいない。中国人が西洋人の名前を漢字で表す場合、ときにこのような中国的なしかけをこらすことがあるが、ただ音だけを映すというものも多い<sup>2)</sup>。

西洋人の姓には、

Smith（鍛冶屋） Miller（粉屋） Taylor（洋服屋） Clark（僧職）

Johnson Jackson White（白） Brown（茶色）

のように職業、父称（～の息子）、あだ名などに起源するものが多い<sup>3)</sup>。しかし、わたしたち

はある人をその名前で呼ぶとき、一々語源を意識しているわけではないし、中国人もこれらを、  
Smith 史密斯 Miller 米勒 Taylor 泰勒 Clark クラーク  
と純粹に音訳している。人名や地名のような名詞は原則として要素に分解して理解しないものなのである。これについて田中克彦1995はつぎのように言う。

固有名詞はそれによって呼ばれる個体を指し示しはするが、これら個体に属するどのような属性を述べもせず、含意もしない。(p. 26)

つまり、固有名詞は意味をもったものと意識されてはいけないのである。

地名も一般には音訳される。たとえば、村田文夫の編になる『洋語音訳箋』(明治5)にあげる、清末中国人あるいは来華西洋人が使用した地名表記に、つぎのようなものがある<sup>4)</sup>。

ロンドン 倫敦 蘭頓 龍動  
 ニューヨーク 紐約克 紐育 紐約克 新約克 新約  
 パリ 巴黎斯  
 ワシントン 華盛敦

「倫敦」は19世紀の中葉(1853『地理全志』)から使われ、その後も現在まで続く安定した表記である。「蘭頓」は中国語で読めばラントンで、原音の Lon に近づけようとしているのがわかる。「龍動」は明治初期の日本でもよく使われたもので、中国読みではロンドンだが、日本語読みではリュウドウになるように、本来中国音から生まれた表記である。ニューヨークの表記はいくつもあるが、どれもヨークをつまる音(入声音)をもつ「約」「育」で表していることは面白い。こうした音は南方の方言に残るもので、現代共通語ではこれらはユエ、ユイとなる。また、あとでもふれるが、上の表記にはニューのところを「新」と意識したものもある。これは一部意識の例である。「巴黎斯」は Paris の s をも読む英語式の読み方。ここにはないが、「巴黎」や「巴里」となると、語末の s を読まないフランス語式の読み方である。現代中国語では、フランス語式の「巴黎」が使われている。「華盛敦」の「華盛」までは比較的安定した表記であるが、現在では「華盛頓」が標準である。

中国語では、人名や地名はこのように音訳されるのがふつうである。ところが、その中にも意識されているものがいくつかある。表題にあげたものは中国語あるいは日本語による外国地名の表記で、漢字検定でも取り上げられることがある、一昔前ならたいの人が知っていたものである。ところが、現在ではこれらすべてに答えられる人はむしろまれだ。今、まず種明かしをすれば、「劍橋」はケンブリッジ、「牛津」はオクスフォード、「聖林」はハリウッド、「桑港」はサンフランシスコということになる。では、こうしたことばはどこで—と言っても日本と中国しかないのだが—どうやってつくられたのだろう。

結論を先に言えば、「牛津」は ox と ford を逐語訳し合わせたものである。しかし、「牛」= ox はともかく、「津」= ford はどこから来たのか。次の「劍橋」は「牛津」とはタイプが異なる。つまり、「橋」はたしかに bridge を訳したもののだが、「劍」は cam を音訳したようにみ

える。「牛津」が純粹意識地名の例だとすると、「劍橋」は音訳+意識=半意識の例となる。しかし、camに「劍」をあてたのはいったい中国人なのか日本人なのか。つぎの「聖林」は、日本でつくられた意識地名で、しかも誤訳といわれているものである。それはいったいどういうことなのか。また、これが日本製だとすると中国ではハリウッドはどう呼ばれているのか。最後にあげた「桑港」の「桑」は、サンフランシスコの音訳である「桑方西西哥」から「桑」の字を抜き出し「港」とくっつけたもので、前半は中国製、より正確に言えば中国にやってきた西洋人の地理書に見られる表記である。しかし、そこから「桑」という字を抜き出し「港」とくっつけたのはどうも日本人らしい<sup>5)</sup>。

地名の音訳については少なからぬ研究がある。先駆的なものは、

○西浦英之1970「近世における外国地名呼称について」『皇學館大學紀要』8

1971「幕末・明治初期の新聞にあらわれた外国地名呼称・表記について」同9

○宛字外来語辞典編集委員会1979『宛字外来語辞典』柏書房

○佐伯哲夫1986a「維新前後の新聞に見る外国の地名表記」『国語年誌 5』神戸大学国語教育学会

○佐伯哲夫1986b「官版バタビヤ新聞における外国地名表記」『関西大学文学論集 創立百周年記念特輯』

で、どれも漢字の音訳地名を研究する場合の出発点とすべきものである。

しかし、音訳地名はかつての中国人を泣かせたように、混沌としていて、その研究は労の多いわりには成果の少ない分野である。たとえば、清末に地理書『瀛環志略』(1848)を編んだ徐繼畲は同書の凡例でつぎのように言う。

外国の地名は最も区別がつきにくい。十人が訳せば十人も違ふし、一人においても前と後ろで違っている。＜中略＞ヨーロッパの各国語の音はもともと異なる。この書ではイギリス人の訳したものもあれば、ポルトガル人が訳したものもある。イギリス人の訳したものは字数は少ないが音が十分でない。ポルトガル人の訳したものは音は十分だが、一つの地名で8、9字になるものもある。

そもそも、音訳地名を研究してどうなるのか。たとえば中国音韻学者の森博達が行ったように、『日本書紀』の歌謡に使われた漢字音を分析することで、当時の日中での音韻をさぐるというなら、多少の苦労もそれなりにねぎらわれることであろう<sup>6)</sup>。今、問題にしている中国の地名に使われた漢字の研究も、当時の方言音の研究に資するというのならまだわかる。しかし、そうした見通しが無い状態では、音訳地名の研究は泥沼に入っていく危険性がある。

それに対し、意識地名の研究は音訳地名とは違って、なんらかの意味が見いだせそうに思う。それは、なぜそのような字をあてたのかということだけでなく、そもそも意識地名という発想はどこから出てくるのかという問題につながるからである。あとでもみるように、後

に意識される地名ももとは音訳されていた時代が長くあった。それがどこかで意識されるのだが、それは、いったい中国人の発想なのか、それとも日本人の発想なのか、はたまた西洋人の発想なのか。

ところで、意識地名といっても、その中にもいくつかのタイプがある。一つは、全くの意識＝純意識のもの、もう一つは、語の前あるいは後ろの部分のどちらかが意識されるもの＝半意識である。この二つのタイプをつぎに順にみていこう。

## 1 意識地名の二つのタイプ

### 1.1 純意識の地名 — 「牛津」

ox は牡牛のことであるが、ここでは雌雄の別は捨象され「牛」だけになった。これに対し「ford = 渡し→津」というのはどこから来たのか。こういうとすぐ思いつくのが、英華辞典である。中国では、19世紀初頭のロバート・モリソン以来、多くの英華辞典がつくられている。初期のいくつかの辞書の訳語を調べてみると、つぎのように、「津」はモリソンでは最後に出ているが、その後の辞書では一貫して最初に置かれていることがわかる<sup>7)</sup>。

ロバート・モリソン英華辞典 (1822) ford 浅処可歩行過河 渡処 津

ウィリアムズ『英華韻府歴階』(1844) 津 涉 渡浅

メドハースト英華辞典 (1847-8) 津 济水之处 水浅处 浅灘

ロプシャイト英華字典 (1866-9) 津 通津 津口 济水之处 浅水 浅灘

したがって、これらの辞書をひもとけば、ford から「津」に至ることはきわめて容易だ。しかし、一方で「津」と言えば、日中間わず昔の知識人には、『論語』「微子」篇の、  
使子路問津焉 (子路をやってその男に渡し場を聞かせた)  
が思い浮かぶだろう。「牛津」和製説も否定できない。しかし、なにせよ、英語の原語に対する理解がなければ「牛津」は出てきようがない。

地名の中では海の名称に意識されたものが多い。たとえば、「太平洋」の初出は清末に来華したイギリス人宣教師ミュアヘッドの『地理全志』(1853)で、これは Pacific Ocean の直訳であるが、それより前、かのリッチにおいては、ラテン語の Mare Pacificum を受け「寧海」(『坤輿万国全図』1602)あるいは「太平海」(『方輿勝略』1612)と訳されたこともあった。オランダ語では、Still Zee であったので、江戸時代の蘭学者はこれを「静海」と訳した<sup>8)</sup>。どれも意識されていることには変わりがない。

これに対し「大西洋」は本来、「亜大臘海」(リッチ『坤輿万国全図』)、「亜太臘海」(アレニ『職方外紀』1623)、「圧蘭的海」(ブリッジマン『聯邦志略』)のように西洋人の作った地理書や地図では音訳がふつうであったし、日本でも「あたら海」(福沢諭吉『世界国尽』)のようなものもあったが、のちにポルトガル西方海域を指していた「大西洋」がこれにとって

代わった。「大西洋」とは本来「大東洋」に対するもので、その「東洋」と「西洋」とは中国南方の海を二分する「東南海」「西南海」という呼び方からきている。のち、「海」は「洋」に代わり、「西洋」は広がって、マッテオ・リッチが中国にやってきたときには自らを「大西洋人」と呼んだが、これは遠方の「西洋」ということで、もともと「西洋」と呼ばれていたインド海周辺はリッチの地図では「小西洋」となった<sup>9)</sup>。こういう風に「太平洋」と「大西洋」とはその起源が大きく異なり、意識地名の対象となるのは「太平洋」でしかない。

「地中海」はラテン語 *mare mediterraneum* (真ん中の海) の意識、「紅海」はギリシア語 *Ἐρυθρὰ θάλασσα* (エリュトウラー海 赤い海) の意識である<sup>10)</sup>。

一つ面白いのは「カスピ海」で、これはかつて日本でもそうであったが、現在中国では「裏海」と書かれる。いったい「裏の海」とはなにか。王1995によれば、「裏海」という表記は元の時代からあるようで、その意味は日本語でいうウラではなく、現代中国語でいう「中」のことである。「内陸にある海」というのがその意味である<sup>11)</sup>。

日本語で「喜望峰」と呼ばれる岬はもともと、発見者バルトロメウ・ダスによって「嵐の岬」と名付けられたが(1488年)、これではインドへ向かう人々に恐れを抱かせると心配したポルトガル王はこれを「希望の岬」と呼ばせた。しかし、マテオリッチの地図『坤輿万国全図』(1602)では旧称にこだわり「大浪山」とし、アレニの『職方外紀』(1623)もこれを踏襲している。魏源が『海国図志』で「大浪山」を採用したのもリッチたちの表記をそのままとったからであろう。しかし、現在中国では「好望角」である。

これ以外では、サンフランシスコ＝「旧金山」がある。といっても、これは「カスピ海」と同じく原語の直訳ではなく、その実態をふまえてつけた名称で、ちょうど、battery (打つもの) を「電池」と訳すようなものである。先にも少しふれたが、中国ではもともと西洋宣教師による音訳「桑方西斯科」というものがあつた。ところがこれは中国では後に引き継がれず、逆に日本人がいち早く使用し、しかも「桑港」という略称までつくってしまったので、当の中国人も日本製と信じて疑わなかったほどである。現在の中国では、サンのみ「聖」を使った、「聖弗朗西斯科」が一般的だが、古い意識である「旧金山」もよく知られている。これはもともとカリフォルニアの金鉱にちなむ命名で、新たにオーストラリアで「金山」が発見され、そこが「新金山」と呼ばれるようになったので、サンフランシスコの方は「旧金山」と呼ばれるようになったのである<sup>12)</sup>。

## 1.2 純意識の地名—和製の地名「聖林」

ハリウッドに「聖林」をあてるのはどうも日本独自のもののようだ。しかも、hollywood の holly というのは holy (聖なる) ではなく、「ひいらぎ」に似た植物のことである。したがって「ひいらぎの林」というのが本来の意味なのだが、それをどうも日本人が holly を holy (聖なる) と間違っ「聖林」と訳したらしいというのである<sup>13)</sup>。

ハリウッドは20世紀になって注目をあびるようになるので、19世紀の中国側資料には出てこない。中国で「好萊塢（ハオライウ）」という音訳で出てくる比較的初期の資料に、陳一甫『歐美漫遊日記』（民国25 1936）がある。

電車中父欲赴好萊塢露天音樂場一遊，余不識途，詢之同車人，知不甚遠，（電車の中で父がハリウッドの露天音樂場に遊びに行きたいと言い出した。わたしは道を知らないのので、同じ車に乗っていた人に尋ねると、あまり遠くないということがわかった。）

同書には「好萊塢明星撰製電影場」（ハリウッドスター製作映画場）ということばも出てくる。この「好萊塢」が、今も引き続き使われており、街角の映画の広告でも目にする。これに対し、日本起源とみられる「聖林」を中国人は知らない。

日本では一部の国名を除き、漢字表記の地名をほとんど使わなくなったが、少なくとも戦前まではかなり使われていた。この中には中国と共通のものもあれば違うものもある。今も使われている国名について言えば、

アメリカ → (日) 米国 (中) 美国

イギリス → (日・中) 英国

フランス → (日) 仏国 (中) 法国

ドイツ → (日) 独国 (中) 德國

のように分かれていて、共通なのは「英国」だけだが、「米」のもととなった「米利堅」、や「仏」のもととなった「仏蘭基」はもと中国でも使われ日本に伝わったものである。ただし、「独」のもととなった「独逸志」は日本独自のもののようである<sup>14)</sup>。

これ以外で日中異なるものをいくつかあげておこう。

アイルランド 愛蘭 (日) — 愛爾蘭 (中)

ハワイ 布哇 (日) — 夏威夷 (中)

フィリピン 比律賓 (日) — 菲律賓 (中)

パリ 巴里 (日) — 巴黎 (中)

ニューヨーク 紐育 (日) — 紐約 (中)

### 1.3 音訳+意訳 — 「劍橋」

「劍橋」とは「Cam 川にかかる橋」ということで、Cam は固有名詞である。これは意訳しようがないので、音訳して、音訳+意訳の語ができあがった。ところで、この「劍」は何語を介してつくられたのか。「劍」は日本の漢字音でケンであるから、日本人がつくったのではないかと疑っても無理はない。しかし、「劍」は現代中国語でも、広州や福建の音ではケンに近い。たとえば、

広州 [kim] アモイ [kiam] (文字改革出版社『漢語方音字彙』1962)

そもそも、中国語の外来語の音訳語というのは、広州から上海までの沿海地方を経て入る

ことが多い。そこで使われていることばは広東語、福建語、閩南語であり、これらの方言の音を考慮する必要がある。たとえば、「葡萄牙（ポルトガル）」は現代中国音ではプータオヤアであるが、福建語ではポルトガルに近いという具合にである<sup>15)</sup>。

音訳+意訳というのは少なからずある。以下にいくつか例をあげる。

「印度洋」インド洋

王敏東1995によれば、「印度」は玄奘三蔵『大唐西域記』やアレニ『職方外紀』（1623）にも使われている古い表記である。これが「海」を表す新しい語である「洋」と結びつき「印度洋」となった。

「漢堡」<sup>ハンバウ</sup>ハンブルグ

『海国図志』60巻本、巻44引く「貿易通志」には「翰堡」と見える。

ブルグは「城、城塞」という意味であり、これを「堡」と訳したもの。同書巻44に引く「万国全図集」には「澳堡」（アウグスブルグ）、「雨山」（レーゲンスブルグ）もみえる。ブルグに「堡」を当てるのは西洋人の書に出るものである。レーゲン Regen とはドイツ語で「雨」のこと。

「馬特峰」<sup>マッターフオン</sup>マッターホルン

これは、音訳+意訳だが、「峰」には音も含まれている。単なる音だけでなく、その中に意味をこめようというのは、中国語の音訳の真骨頂を示すものである。

以上は、音訳+意訳の例であるが、意訳+音訳というものもある。それは、ニュー（新）、セント、サン（聖）などの一種の接頭辞を含むものである。たとえば、

ニュージーランド→「新西蘭」

サンパウロ→「聖保羅」

しかし、前者について言えば、すべてのニューが意訳されるわけではなく、「新」で訳されるものと、音訳としての「紐」が使われるものがある。たとえばつぎのように。

New Britain 新不列顛

New England 新英格蘭

New Castle 紐卡斯爾

Newfoundland 紐芬蘭（島）

Newyork 紐約

#### 1.4 音訳+意訳—日中合作—「桑港」

「桑港」については上でもふれたし、荒川1997でも詳しく述べたので、ここではくりかえすことをしないが、かつては中国人でさえもこれを和製の地名だと信じてきた例証を一つ加えておきたい<sup>16)</sup>。

梁啓超『新大陸游記』（旧金山之華人）

旧金山本名三藩蘭斯士哥，日本人通訳作桑港，華人呼以今名 (p. 539)

「桑港」は西洋人宣教師ミュアヘッドが編んだ地理書『地理全志』(1853)の「桑方西斯科」の「桑」と「港」を日本人がくつつけたもので、現在中国では「聖弗朗西斯科」と、意識である「旧金山」が行われている。

## 2 初出を探る

### 2.1 中国側資料

1では意識地名を、純意識のもの、意識+音訳=半意識のものに分け、その中でも和製のもの、日中合作のものがあることを見てきた。ここでは、「牛津」と「劍橋」を中心に、その歴史の変遷をさぐってみたい。というのは、「牛津」や「劍橋」は最初から意識あるいは半意識されたわけではなく、当初の長い期間にわたって音訳の時期があったことを示しておきたいからである。

今手元に村田文夫の『洋語音訳筌』(明治5)がある。この『洋語音訳筌』というのは、上でも少しふれたが。清末に西洋人や中国開明官僚によってつくられた地理書から音訳人名、音訳地名、それに一部の音訳語を抜き出したものである。凡例によればもとなつた資料は以下のとおりであるが、これは当時、海外知識を求めていた人々がどのような本を見ていたかを知る貴重な資料でもある<sup>17)</sup>。

『瀛環志略』『海国図志』『啖咭喇紀略』『地球説略』『聯邦志略』『万国公法』『地理全志』『英国志』

最初の三冊が中国人開明官僚、他は西洋人宣教師の手になるものである。ところで、われわれが今さがしもとめている意識、あるいは半意識の「牛津」や「劍橋」は、これらの書には出てこず、出てくるのは、以下のような音訳の語でしかない。

オクスフォード→(ヲックスホルド)「阿斯仏」「阿哥斯仏爾」○英国の地名

ケンブリッジ →(カンブリッジ)「堪比日」「岡比黎日」「堅不列痴」○英国の地名

個別にみると、ミュアヘッドの『大英国志』には「阿斯福」とあり、村田のものとは「仏」と「福」が入れかわったりしている。(ケンブリッジは「堪比日」。ともに同書巻8「学校志略」)また、「岡比黎日」は『瀛環志略』に出る音訳語。

上にあげた資料は、19世紀中葉以降に出たものである。これ以後の資料として、鐘叔河編になる『走向世界叢書』(岳麓書社出版)を使いたい。本叢書は清末に海外へ赴いた外交官、留学生たちの記録を集めたもので、清朝時代の中国人がなにを見、なにを考えたかを知る資料であると同時に、近年近代中国語の語彙資料としても注目されているものである。まず、そこに治められた書名と簡単な注をそえる。なお、日本訪問記の中には省いたものがある。

林鍼『西海游紀』1847 アメリカ商人についてアメリカへ 1849年ころ定稿



- 斌椿『乗槎筆記』1866 同文館の学生を引き連れ欧州諸国をめぐる  
 志剛『初使泰西記』1868 欧米へ  
 張徳彝『航海述奇』1862 斌椿について欧州へ 68-70 志剛について欧米へ  
 張徳彝『歐美環游記』1875刊 アメリカ、イギリス、フランスへ  
 容閔『西学東漸記』1847-54 アメリカへ留学  
 祁兆熙『游美洲日記』1865 留学生を送ってアメリカへ  
 張徳彝『随使法国記』1870 通訳としてフランスへ パリコミュンを目撃  
 羅森『日本日記』1854 ペリーについて日本へ 1854-5『遐邇貫珍』に発表  
 郭嵩焘『倫敦与巴黎日記』1876-8 英国、仏国大使を勤める  
 曾紀沢『出使英法俄国日記』1878-88 郭のあとを継いで英仏、ついで露へ  
 王韜『漫游随録』1867 オクスフォード、エジンバラを訪問 スコットランドに2年滞在  
 ののち香港へ  
 王韜『扶桑游記』1897 日本へ  
 李圭『環游地球新録』1876 フィラデルフィアの万国博に出席、米欧を訪問  
 黎庶昌『西洋雑誌』1877 郭嵩焘について英独仏へ 1900刊  
 劉錫鴻『英軺私記』1877 郭嵩焘の副使として英、のち独へ  
 張徳彝『随使英俄記』1877 郭の随員として英、露へ  
 徐建寅『欧游雜録』1879 欧州へ  
 薛福成『出使英法義比四国日記』1890 英、仏、義、比へ  
 李鴻章『歷聘歐美記』1896 露から欧米を巡る  
 錢单士厘『癸卯旅行記』1899 日本から欧州へ  
 梁啓超『新大陸游記』1903  
 康有為『欧州十一国游記』1904  
 戴鴻慈『出使九国日記』1905  
 載沢『考察政治日記』1905

以上のうち、オクスフォード、ケンブリッジの地名が出てくるのは、以下の書である。

○張徳彝『航海述奇』1862

明等自倫敦上火輪車，西北行一百五十里，午刻抵敖四仏村

「敖四仏村」とはアオスーフー村つまりオクスフォードのことである。

○斌椿『乗槎筆記』1866

二十五日 乘火輪車北行一百八十里，阿（熬克）斯福

これは『地理全志』や『大英国志』で用いられていた表記である。斌椿はそうした書物を読んでいたのであろう。

## ○郭嵩焘『倫敦与巴黎日記』1876-8

郭嵩焘は英国大使、仏国大使を歴任した人で、その日記の内容は多方面にわたっていて興味深いものがある。そこには、オクスフォードとケンブリッジに関する記事が何カ所にもわたってみえる。

1877（光緒3）10月17日

英国両大書院，一在阿斯福，一在刊比里治。聞刊比里治尚実学，而阿斯福尚古学，兩相濟也。

23日 英国大学館以阿斯福，堪百里治二処為最勝。

1878（光緒4）10月2日 俟有成，即分別入阿思弗，堅百里治上学館。

同じ人の日記でも表記がゆれているのがわかる。

## ○王韜『漫游随録』1867

中国近代では傑出した人物の1人である王韜は、オクスフォード、エジンバラを巡っていて、そこにもオクスフォードが出てくる。

英之北土曰哈斯仏，有一大書院

これはオクスフォードだが、上の二人とも表記が異なる。このように、当時は表記がまだ一定していなかった。しかも、要素に分解すればすぐ「牛津」となりそうなものを、かれらはあくまで音訳しようとしていた。

ところで、中国人には、基本的に漢字で書かれた人名、地名は国の違いを問わず中国語の音で読むという習慣がある。たとえば、筆者の姓荒川ならホアンチュアン、豊橋ならフォンチアオという具合にである。現在の地理教育では現地音主義がかなり普及していて、中国の地名でも、「重慶チョンチン」「四川スーチュアン」などと読んでいるし、中国からの留学生の名前も「ワンさん、チャンさん」などと現地音で呼んだりしているので、一昔前とは状況はかなりかわってきていると言えるが、それでもお互い漢字を知っているという安心感から、日本人は中国の地名を日本読みするし、中国人も日本の地名を中国読みする<sup>18)</sup>。筆者はこれがいっただいいつからの現象であるかずっと気になっていた。それが、今回、上にあげたような清末の知識人の旅行記類を調べていて意外なことに気がついた。それは、かれらの旅行記、日記の中で、日本人の名前や地名が日本読みされていたり、あるいは日本読みへの関心がみられることである。

実はこのことは清末に上海で発行され、幕末日本にも舶載された『六合叢談』<sup>れくごう</sup>という雑誌を読む中で気づいていたことでもあった。たとえば、次の記事はペリーが日本で安政の和親条約を締結したことを報道した記事である。

合衆与日本和議既成，乃立通商条約以垂永久，集議於西莫大衙署。

合衆国商舶至西莫大哈谷大隸長崎（1857・12）

このうち、「西莫大」は日本の漢字音で読めば「サイバクダイ」となってわけがわからない

が、中国音で読めば「シモタ」となって「下田」であることがわかる。「哈谷大隸」は中国音で読むと「ハクタリィ」最後の一字は本当は「ティ」でないといけないのだが、「リィ」となっている。しかし、これが「函館」であることはわかる。こういうふうに日本の地名も中国音で読まれた時代があったのだが、「長崎」はそのまま漢字で示されていることにも注意してほしい。「長崎」は江戸時代も中国との交易の窓口であったように、中国の人々には知られていた地名であり、在華西洋人たちもそれに習って中国音で呼んでいたのかも知れない。それに対し「下田」や「函館」はペリーによってもたらされたニュースに出てくる（漢字を媒介としない）地名であり、西洋式の＝つまりは現地音式の読み方がそのまま伝わっていた可能性がある。

さて、上記の資料の中ではつぎのような興味ある箇所がある。

○郭嵩焘『倫敦与巴黎日記』光緒3年（1877）5月15日

日本哈基蘇克来見，言就学阿思弗小学館。

「哈基蘇克」とは中国音で読めばハチスカとなり、日本人の名前であることがわかる。「阿思弗」とあるのは、上でも出てきた「オクスフォード」である。「蜂須賀という日本人が尋ねてやってきた。なんでもオクスフォードの小学館で勉強しているとのこと」という内容である。

次の資料は、日本読みに対する関心を伝えるものである。

○張徳彝『歐美環游記』1875

富士山 土人呼為“福思雅瑪” 日本人呼兵庫曰“消溝”，深江曰“那嘎撒吉”  
横浜“由勾哈瑪”

「福思雅瑪」は「フースヤマ」＝「ふしやま」，「消溝」はシアオコウ＝兵庫（ヒは中国語にないのでシとなる），深江は「ナコサチ」＝ながさき（「キ」も中国語にはないので「チ」となる）。最後の「由勾哈瑪」はヨウコウハマ＝よこはま，のことである。こんなふうに日本の人名、地名もかつては日本読みされた時代があったということは特記しておいてよい。

## 2.2 日本側資料

19世紀における中国側資料を使い、オクスフォードとケンブリッジの意識の初出を探したが、意外にもそこにあるのは音訳の例ばかりであった。では、同時期の日本側資料ではどうであろう。以下、19世紀から20世紀初頭にかけての日本側資料をみてみたい。

○青地林宗『輿地誌略』巻5（文政2頃 1826）

○学館 甘答貌律入亜（カムタブリジア），屋吉斯福爾度（ヲキスホルド）の兩大学校の外ここには音訳しか出てこない<sup>19)</sup>。

○『西洋聞見録』（明治2 1869）巻中

英蘭ノ一府ケムブリッチト云ヘル所ハ，四方ノ学生会湊シ最モ文学ノ盛ナル所ニシテ，大小学校十七ヶ所アリ。

『洋語音訳箋』の編者である村田文夫の西洋見聞記である。しかし、ここにも音訳しか出てこない<sup>20)</sup>。

- 内田正雄『輿地誌略』(明4 1871) 卷4 55ウ

阿斯福(オキシフアルド)人口三万二千アリ此処ニ有名ナル司天台及ビ大学校有リ

『輿地誌略』は明治初期、福沢諭吉の『西洋事情』と並ぶベストセラーであった書だが、ここでも音訳しか出てこない。「阿斯福」は『大英国志』に使われた表記である<sup>21)</sup>。

- 穂積陳重「独逸国へ転国ノ願書」(明治12 1879)

オクスホールド大学校 ケムブリッジ

まずイギリスに留学し、ついでドイツへの留学を願った穂積陳重の請願書に出てくるもので、これも音訳である<sup>22)</sup>。

以下、明治期の地理書、旅行記の類をあげるが、どれにも意識の「牛津」「劍橋」は出てこない。

- 『地学新篇』(初版 明22 1889)<sup>23)</sup>

おつくすほると・ケンブリッヂは共ニ大学校ノアルヲ以テ有名ナリ(下 p. 82)

- 依光方成『世界周遊実記』(明24 1891)<sup>24)</sup>

ヲクスホールド大学校

- 『万国地理初歩』(明26 1893)

我等ハ倫敦ヲ去リ、けんぶりっちノ大学校ヲ一覽シ(下 p. 36オ)

「倫敦」は漢字表記であるが、ケンブリッジは平かなで書かれている<sup>25)</sup>。

- 矢津昌永『中学万国地誌』(明29 1896)

大学ニ至リテハ世界ニ著名ナルモノ少ナカラズ英倫ニ於テハおつくすふおると(Oxford) きやんぶりじ(Cambridge)ノ両大学ヲ始メトシ(中 p. 124)

矢津は明治中期における啓蒙地理学者で、かれの本はその多くが中国語に訳されたほどである<sup>26)</sup>。

- 夏目漱石 日記(明33 1900 11/1-2)

十二時四十分ノ汽車ニテ Cambridge ニ至リ…田島氏ノ案内ニテ Cambridge ヲ遊ス  
7.45ノ汽車ニテ倫敦ニ帰ル

漱石はロンドンを「倫敦」と書いているが、これはあやまり。ケンブリッジは英語表記である<sup>27)</sup>。

- 大岡育造『欧米管見』(明34 1901)<sup>28)</sup>

英国ケンブリッヂ大学

- 建部遼吉『西洋漫筆』(明35 1902)

ケムブリッヂ, オクスフォードの如き大学

- 森次太郎『欧米書生旅行』(明39 1906)

オックスフォード大学とケムブリッジ大学

- 『最新統合外国地理』（原著山上万次郎 谷鐘秀中訳1907）<sup>29</sup>

又倫敦北方之康歩履吉・Cambridge 西方之阿思弗 Oxford 共有名之大学

これは日本書を中国語に訳したもので、もし、日本書の方で意識がされていれば、きっと中国版でもその意識を採用しただろう。ところが、中国訳でも音訳しか示されていない。しかも、「康歩履吉」はこれまでなかった表記で、翻訳者の考案かと考えられる。

興味あるのは、小山1999にあげる各種資料である。小山1999は本来、菊池大麓を中心とする明治期ケンブリッジ日本留学生のことを書いたものだが、その中に、本テーマに関する興味深い資料が混じっている。まず、次の記事。河野真孝が毛利五郎のことを井上馨に報告した文書である。

- 国会図書館井上馨関係文書（河野真孝 明23/11/26 書簡）

[毛利五郎] ハ乾校ニテハ、華族社会ノ主トシテ就学スルノ校ニ入校ノ希望有之

小山はこの「乾校」をケンブリッジのことだと言っているが、それ以上の関心は示していない。この「乾校」については、あとでみることにする。時代はこれから約20年さがるが、同書にあげる大正期の資料には「牛津」「劍橋」がともに現れる。

- （大4 1915）留学生九条良致からの返信（小山1999, p. 207）

劍橋見学ノ目的ハ学位ヲ得ニアリ。

- （大6 1917）8月23日『朝日新聞』菊池大麓の死の報道（小山1999, p. 241）

三対の花輪の中には劍橋大学牛津大学より贈れる花輪あり、

したがって、オックスフォード、ケンブリッジという音訳が意識に変わる節目は1910年ころということになる。

一方、中国側資料では、1900年代初頭にまず「牛津」が現れ、「劍橋」はそれよりおくれる<sup>30</sup>。

『学部審定 外国地名辞典』 牛津 岡比黎日

（初版光緒30 1904 宣統元年訂正4版・1909による）

『辞源』（民4 1915） 牛津即奧克斯福之義。詳奧克斯福条。

『標準漢訳地名辞典』（民13 1924） 牛津  
開姆利治（劍橋）

『重編日用百科全書』（民23 1934） 牛津 劍橋

『辞海』（1938） 牛津即鄂斯福。詳鄂斯福条。  
劍橋即岡布里治。詳岡布里治条。

『最新中外地名辞典』（1940） 牛津 一作荷格斯仏特  
劍橋 一作岡比利日

「牛津」や「劍橋」は出ているものの、同時に音訳の語を付記していることに注意したい。

しかも、『辞海』（1938）あたりまでは、むしろ音訳の方が優勢である。

ここで、先の小山1999に引く1890年の資料に「乾校」とあったのを思い出してほしい。「乾」はカン、ケン両方の音があるが、ここではおそらくカンの方で読まれているのであろう。そして、そのころこの略称は関係者の間ではすでに知られていたと思われる。しかし、それはいったいどこからきたのか。

その一つのヒントをあげておきたい。それは、アヘン戦争の敗北を教訓に海外事情紹介と国防を説いた魏源の『海国図志』に引かれる地理書の地名表記である。本書は、50巻本が1842年に、60巻本が1847年に、そして100巻本が1852年に出ている。日本へは60巻本がまず伝えられたようで、それを元にした翻刻、翻訳本がおびただしくつくられた<sup>31)</sup>。

今、その原刊本60巻本の巻34「大西洋 英利国一」（100巻本 巻51）に、「万国地理全図集」からの引用として次のような一段がある。

干橋邑乃大英有名之書院，学儒攻書之地。

「干橋」というのはケンブリッジのことである。「干」の字は、同図集でカンタベリーを「干得布利」としていることから、CanterburyのCanやCambridgeのCamにあてていることがわかる（現在では「坎特伯雷」）。ちなみに、同図集では、オクスフォードは「屋度」となっている<sup>32)</sup>。ところで「干」は「乾燥」の「乾」に通じる。先の「干校」という表記はあるいはこのあたりから来ているのかも知れない。とすると、ケンブリッジはまず西洋人によって「干橋」と訳されたあと、「干」の部分がのちに「劍」となったのだろう。それはたしかに中国の方言音に基づいてはいるが、「劍」の字をあてたのはあるいは西洋人であったかも知れない。

興味深いことは、同じ「万国地理全図集」でグリニッジ Greenwichを「緑威」と訳していることである。これも意識+音訳の例である。ところが、グリニッジは中国では、現在「格林尼治」と音訳され、半意識の方はむしろ退けられている。こういう点も注目して置いてよい。一方「緑威」は、かつての日本では使われていた<sup>33)</sup>。

ところで、この「万国地理全図集」を書いたのは、ドイツの宣教師ギュツラッフ Gützlaffである。ドイツ語というのは、外来のものが入ってきたとき、要素つまり形態素に分解して逐語訳するという伝統がある。というより、これはもともとギリシア語からラテン語、ラテン語からドイツ語という借用においても古くから見られた現象で、言語学ではcalqueと呼ばれている<sup>34)</sup>。こういう伝統をもったある言語話者が中国語に接したとき、西洋の地名であれ要素に分解して逐語訳をするということが起こったのではないだろうか。

ただし、構成要素の意味に基づいて逐語訳するというのは、江戸日本の蘭語学の伝統でもあった。たとえば上でもみたように、「太平洋」は江戸時代「静海」と訳されたが、これはオランダ語のStill Zeeを訳したものであるし、「半島」はオランダ語のhelfeilandを逐語訳したものである<sup>35)</sup>。「十二指腸」「盲腸」といった医学用語は枚挙にいとまがない<sup>36)</sup>。したがって、日本人がオクスフォードを「牛津」と訳したことも否定できない。先の小山1999の資料で大

正期に入るとどっと出てくるということも示唆的である。最近話題になったコンピューター用語にハッカーというのがあるが、中国人はこれを意味から問題にするのではなく、その音を媒介に別の意味づけをして「黒客」と呼んだ。中国語で読めばヘイカー、「黒」は中国語では「まともでない、不正な」という意味である。このような意識の発想と、形態素の意味に基づく地名の意識の発想の間には大きな差があるように思う。

## 注

- 1) 本稿は雑誌『しにか』(2000年6月号)特集「漢字もの知り Q & A」に寄せた拙稿「『聖林』はハリウッド、では「牛津」「剣橋」は」を大幅に調べ直し、6月の愛知大学言語学談話会で報告したものをもとにしている。席上貴重な意見をいただいたメンバー、とりわけ中京大学の伊藤忠夫氏に感謝したい。
- 2) この問題については荒川1999、7月号～9月号「相手と呼ぶことば (3)姓と名」以下で述べた。
- 3) 西洋人の人名についての邦文で書かれたものとしては、木村正史1980、同1997、梅田修1999、同2000が詳しい。
- 4) 『洋語音訳箋』は天民館蔵本。天民館は村田の『西洋聞見録』を出したところでもある。
- 5) 「桑港」については荒川1997、p. 280～286で詳しく述べた。
- 6) 森博達1999『日本書紀の謎を解く』中央公論社
- 7) モリソンの辞書は愛知大学蔵(ゆまに書房復刻あり)、ウィリアムズ『英華韻府歴階』は早稲田大学図書館、メドハースト英華辞典は国立国会図書館、ロプシャイト英華字典は家蔵(東京美華書院復刻あり)のものを利用した。
- 8) 『地理全志』は宮城県図書館所蔵のものを利用した。なお、「太平洋」の語史については荒川1997、p. 173、258等を参照。
- 9) 「大西洋」については荒川1997、p. 170を参照。
- 10) 「地中海」「紅海」は王敏東1995に詳しい。荒川1997、p. 66も参照。
- 11) 「裏海」については王敏東1995が詳しい。また、邵猷図等編1983も参照。
- 12) 荒川1997、p. 280～286を参照。
- 13) 『広辞苑』には「俗に、HollyをHolyと誤り『聖林』と書く」とある(第4版 1991)。第1版では「『聖林』と書くのは誤訳」、第2版(1969)第3版(1983)では「俗に『聖林』と書く」とあったもの。また、木村正史1994、p. 85も参照。
- 14) 王敏東1995、荒尾1983を参照。
- 15) 周振鶴1998、p. 3「葡萄怎么会牙? (葡萄にはどうして牙があるのか)」。
- 16) 梁啓超『新大陸遊記』は『走向世界叢書』所収のものによる。
- 17) 松井利彦1983は本書を手がかりに明治期の漢語の出自をさぐっている。
- 18) この問題については荒川1992でふれた。
- 19) 青地林宗の『輿地志略』は『文明源流叢書』本による。
- 20) 『西洋聞見録』は明治文化全集(第16巻「外国文化編」)本による。
- 21) 内田正堯の『輿地志略』は家蔵本。
- 22) 穂積重行1988による。
- 23) 『地学新編』は内田嘉一著、金港堂蔵版(明治22)。
- 24) 『世界周遊実記』は『明治欧米見聞録集成』(ゆまに書房1987～1989)による。
- 25) 『万国地理初歩』は学海指針社編(明治27)。

- 26) 『中学万国地誌』は丸善株式会社から出ている。家蔵本。
- 27) 岩波版『漱石全集 第13集 日記及断片』(1966)による。漱石のケンブリッジ訪問は、留学先の一つの候補として見学に出かけたもの。荒正人『増補改訂漱石研究年表』(1984 集英社) p. 258の注(103)(105)を参照。
- 28) 『欧米管見』以下の三書は『明治欧米見聞録集成』による。
- 29) 『最新統合外国地理』は家蔵本。明治中期に中国訳された地理書の一つ。
- 30) 『学部審定 外国地名辞典』は新学会社版。日本の文学士坂本健一の著に基づくが、地名の音訳は中国側で従来用いられていたもの、あるいは新たに作られたもので、常用のものを採ったと述べている。これを含め以下、『辞源』(民4 1915 商務印書館)、『標準漢訳地名辞典』(民13 1924 商務印書館)、『重編日用百科全書』(民23 1934 商務印書館)、『辞海』(1938 中華書局)は家蔵本。『最新中外地名辞典』(1940 中華書局)は愛知大学蔵。
- 31) 『海国図志』の版本の問題については荒川1997, p. 242~243を参照。
- 32) 『海国図志』の地名の復元については陳華等点校注釈『海国図志』(岳麓書社 1998)を参考にした。本書は咸豊2年(1852)の100巻本古微堂重刊本を底本に諸本を比較し、その最良のものを取ったものという。参考にはなるが、諸本の比較ができないことは惜しい。荒川1997, p. 242では、一部ではあるが、50巻本、60巻本、100巻本の比較を試みた。
- 33) 『海国図志』の説明には、  
係水手受傷之後、老邁所退之院(水兵がけがをしたり、年老いて入る所である)とある。また日本における「緑威」の使用については『宛字外来語辞典』を参照。
- 34) calqueについては伊藤忠夫氏から多くの教示を得た。
- 35) 「半島」については荒川1997, p. 19~21を参照。
- 36) オランダ語からの医学用語の和訳については齋藤1967が詳しい。

### 参考文献

- 荒尾禎秀 1983 「米国」『講座日本語の語彙 11 語誌Ⅲ』明治書院
- 荒川清秀 1992 「日本人の名前や地名を中国式に読むことについて」『しにか』5月号 大修館書店
- 荒川清秀 1997 『近代日中学術用語の形成と伝播』白帝社
- 荒川清秀 1999~2000 「ことばと文化」『NHK ラジオ中国語講座テキスト』4月号~3月号 日本放送出版協会
- 梅田修 1999 『世界人名ものがたり』講談社
- 梅田修 2000 『ヨーロッパ人名語源事典』大修館書店
- 王敏東 1995 『外国地名の漢字表記についての通時的研究』大阪大学提出学位論文
- 木村正史 1980 『英米人の姓名』鷹書房弓プレス
- 木村正史 1994 『アメリカ地名語源辞典』東京堂出版
- 木村正史 1997 『続英米人の姓名』鷹書房弓プレス
- 小山騰 1999 『破天荒(明治留学生)列伝』講談社(選書メチエ)
- 齋藤静 1967 『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』篠崎書林
- 田中克彦 1995 『ことばと名前』岩波書店(岩波新書)
- 穂積重行 1988 『明治一法学者の出発 穂積陳重をめぐって』岩波書店
- 牧英夫編著 1989 『世界地名ルーツ辞典』創拓社
- 松井利彦 1983 「近代日本語と漢訳書の漢語」『広島女子大学文学部紀要』第18号



- 教育部 1955交付『外国地名訳名』国立編訳館編訂 台湾商務印書館  
上海辞書出版社編 1981『世界地名詞典』上海辞書出版社  
邵猷函等編 1983『外国地名語源詞典』上海辞書出版社  
中国地名委員会編 1983『外国地名訳名手冊』商務印書館  
新華出版社 1984『日漢世界地名訳名詞典』新華出版社  
中国地名委員会編 1993『外国地名訳名手冊』商務印書館  
王玉林主編 1996『名称由来1001』中国青年出版社  
周振鶴 1998『逸言殊語』浙江摄影出版社